宮崎県歴史の道調査報告書

鵜戸街道

1978

宫崎県教育委員会

鵜戸神宮往還

(宮崎一内海一鵜戸一油津)

熊谷間道

(油津一隈谷一谷之口)

榎原神社往還

(谷之口一榎原)

目次

1.	鵜戸街道の特色 1
2.	鵜戸街道の歴史1
3.	鵜戸街道2
4.	街道沿いの文化財4
5.	写真及び古地図3-(1)

宮崎県はかっては交通不便の地とされていましたが、近年急速な近代化の波を受け、古来から人や文物の交流の舞台となった道も年々姿を変えています。

その道のもつ歴史的背景、道の果たした役割、 道の現状等を明らかにする「歴史の道」調査を、 全国にさきがけ、昭和52年度に県北五街道を実施しました。昨年に引き続き、昭和53年度は県 南四街道の調査を実施し、一昔前の街道や街道沿いの交通遺跡の残存状況の実態を明らかにいたしました。

本報告書は、街道地図・街道の特色・街道の歴 史・街道の様子・街道沿いの文化財や遺跡の解説 からなっています。

短期間になされた調査ですので不備な点もあろうかと思いますが、本県交通史の研究資料として、 又、歴史の道保存のための基礎資料として御活用いただければと思っております。

最後に、資料による事前調査、実地調査、報告 書作成と、それぞれお忙しいなかお骨折りいただ いた調査員の方々に厚くお礼申し上げます。

> 昭和54年3月 宮崎県教育委員会 教育長 四 本 茂

例 言

いるが、間道あり脇道ありで複雑をきわめるので、街道図を参照していただきたい。

1. 街 道 名

江戸時代にあっては,道路の規模により街道と往還を使い分けていたようであるが,現 在往還は用いないのですべて街道とした。

また,志布志街道をのぞく他の街道は,厳 密にいえば2ないし3往還に細区分される。

しかし,すべてをあげる必要もないので, 距離も長く中心となるものを代表させた。

2. 街道の概要説明

街道の詳細な記述は、街道沿いの交通関係 遺跡の解説に譲り、ここでは街道の持つ歴史 的背景、街道の果たした役割、街道の現状等 を概括的に記した。

3. 街道沿いの交通関係遺跡解説

(1) 個々の解説の前半に、遺跡及び遺跡周辺の状況、遺跡と遺跡間の状況を過去から現在にわたって述べ、後半に遺跡そのものの解説を付した。

従って個々の解説をとおして読めば、起 点から終点迄街道の全容が把握できる。

- (2) 街道沿いの主な集落には、戸数、集落間 の距離又は起点からの距離を記したが日向 地誌によった。地誌は明治8年の調査をも とにしている。
- (3) 集落間の距離,起点からの距離で,何里 何町と記してあるのは日向地誌によるもの で,他は地図から割出した距離であるので 正確は期しがたい。一応の目安としていた だきたい。
- (4) 交通関係遺跡の配列はほぼ道順に沿って

1 鵜戸街道の特色

宮崎市の中村町から七浦七峠を越え鵜戸に至る道、飫肥の今町から鳥居峠を越え鵜戸に至る道、平山から風田の浜道を通り同じく鳥居峠を越え鵜戸に至る道を、古くは鵜戸神宮往還と言った。

今回の調査では、これらの街道に榎原から油 津までの街道を含め、鵜戸街道として調査の対 象とした。

この街道は、言ってみれば鵜戸さん参りの道、 榎原さん参りの道であるが、参勤交代の道、又、 浦里と浦里との往来道でもあった。

鵜戸神宮は、鞍馬、箱根と並ぶ我が国三大権 現の一つであり、榎原神社は鵜戸神宮の神霊を 勧請し創建したもので、何れも飫肥藩主の庇護 を受けた。

宮崎から鵜戸への道は、日向離の海岸部を荒磯で通行困難な所は峠路をとり、入江で通行可能な所は浜道を歩いた。これを七度繰り返す、いわゆる七浦七峠を越して鵜戸に至る道である。 峠路は急坂であるが、木の間ごしに日向灘や岬の景色を楽しみ、頂上の茶屋では甘酒をすすり、又、団子をほおばるという苦しくとも楽しい旅であった にちがいない。ことに単衣の着物にしでき帯、白脚絆姿で髪型は高島田か丸まげのういういしい花嫁を馬に乗せ、これまた、黒股引に黒脚絆、草鞋ばき姿のりりしい花婿が手綱をとって、馬の首にとりつけた直径一寸五分もある肥後鈴をシャンシャンと響かせながら行く新婚さんは楽しい旅であったろう。

県南では、「嫁を鵜戸詣りに連れて行けないような男には娘をやるな」と言われたぐらいである。このほほえましい風習も明治の中期には徐絶えた。

榎原から鵜戸に至る街道も、宮崎から南下する街道に劣らず変化に富んだ道である。榎原から上方までは南郷川沿いの山際道、上方から油津までは山裾を行く道、広渡川を舟で渡って約3 km続く白砂青松の浜伝い道、そして、鳥居峠を越すと鵜戸である。

現在、浜伝いの道はほぼ現在の国道と重なり旧道の面影をとどめないが、峠路は茶屋跡、石垣道、道標としての石仏等を残し江戸時代の旅情を味わうことができる。

2 鵜戸街道の歴史

鵜戸山は崇神天皇(2~3世紀初)の頃の 創建とされるが、恒武天皇の勅令により、僧、 光喜坊快久が寺院と僧堂を再興し、延暦元年 (782)鵜戸山大権現吾平山仁王護国寺 の勅号を受けた。長禄3年(1459)後 花園天皇の勅使が参拝している。

文明16年(1484) 伊東祐国は軍を 一手は清武、北郷から、もう一手は鵜戸、東 郷からと二手に分けて飫肥に攻め入ったが、 八千の軍勢が鵜戸路を埋めたという。天文年 間に伊東義祐(三位入道)もこの街道に軍を 進め、瀬平峠と鳥帽子峠に砦を築いて飫肥攻 略を果たした。

鵜戸山は又、修験の道場として世に聞こえ、 足利時代念流を創めた慈恩(相馬四郎義元)、 江戸時代陰流を創めた愛州 移香が霊窟で己れ の剣法をあみだした。

戦国時代は戦いのために軍馬を進めた道、 武芸者が修業のために行き交った道であった。 "西の高野』としてお遍路さんの一行が,又 鵜戸山参りのシャンシャン馬が行き交ったの は、世の中が安定した江戸期も後期になって からであろう。

この間の道中記は、飫肥攻略を果たした伊東 義祐の飫肥紀行、橘三喜の一宮巡詣記、伊能忠 敬の測量日誌等がある。

榎原、鵜戸間は鵜戸街道ほど記録がなく、街 道の歴史解明はこれからである。

3 鵜 戸 街 道

(1)中村町から折生迫へ

中村町から大淀川と平行する道を東へ進むと、かって、「赤江城ケ崎は撞木の町よ金が ① なければ通られぬ | と言われた城ケ崎に出る。

城ヶ崎は、大淀川河口にある赤江港により 繁盛した町である。昭和40年頃まで残って いた古い家並も今は見られない。

城ケ崎の四辻を右折し南に進むと、街道右側に宝泉寺がある。ここには、江戸時代俳句をたしなんだ商人たちの俳人墓地がある。更に進むと、街道右側に恒久神社があり、ここから約600mでまた四辻に出る。ここから、国鉄日南線と国道200号線に挟まれた街道約11mは、比較的旧道の面影を残し、酒屋や酢の製造元など、白壁に格子戸の家、土蔵が残る。

この通りがつきると、国道と合流するが、 本郷南方まで現在の国道と重なるため、旧道 の面影は全くない。

加護神社から旧道は山際道を行くが、かっては農家しかなかったこのあたりも、新興住宅が建ち並び、農村的なたたずまいは見られない。

江佐原の集落を出ると、清武川の河口に開かれた水田地帯に出る。江佐原は明治の初め49戸の集落であり、鵜戸伸宮はここからお

およそ8里19町(約35 km)の道のりであるが、当時の街道の道幅は、日向地誌によると、9尺(約2.7 m)である。

水田の中を行った旧道は、現在畦道と化しているが、約1 Mmで鬼塚の渡しに至る。清武川を越すと熊野、そして、中島の集落である。 が、途中に加江田神社がある。加江田川の天神渡しを渡り、川沿いの山際道を東進すると 曽山寺である。曽山寺は、明治の初め37戸の集落であった。

曽山寺から折生迫までは国道と重なる。途 の 中に青島があるが、参道入り口にはホテル、 食堂、土産物店が林立し、かってのひなびた 海岸風景はなくなっている。

(2)折生迫から鵜戸へ

鵜戸街道最大の難所である七浦七峠は、折 生迫から鵜戸まで続く。

日の御崎峠、内海峰、内海の浦 小内海の ③ *5 * 49 浦、鶯巣峠、鶯巣の浦、伊比井越、伊比井の 頭、馬の峠、鶯巣の浦、瀬平峠、小目井の浦、 20 宮浦、烏帽子峠、以上が七浦七峠である。

内海峠は上り下り約4.5 kmであり、現在、 杉の植林がなされ、峠路の真下を国鉄日南線 の青島トンネルが通過している。内海港は古 くからの港で、明治の初めには56艘もの船 があった。内海と小内海間の約3.5 kmは国道 220号線と一致する。鶯巣の峠路は約2 km で峠路の小内海側東麓は別荘地として開発され、旧道の大半が滅失しているが、下り道の 鶯巣側は杉林、段々畑内に旧道が残っている。 又、鶯巣には関所があった。

伊比井越は約1.5 kmで、鶯巣側は広葉樹林を行く窪み状の道で往時の姿をよくとどめている。伊比井側は一部みかん畑の中を行くが、 農道として現在も利用されている。伊比井には宿屋があったと言う。

伊比井川の渡しを渡り、短いが急坂の馬の 峠を越すと富土であるが、この間約2 Kmであ り、富土川を渡ったあたりから頼平峠登り口 までは現在の国道と重なる。

類平峠の北側の富土側は比較的なだらかな 登り坂だが、道としての機能を失った現在は 樹林で出来たトンネル道と言った方がふさわ しい。峠の南側は杉林で急な坂道となってい る。峠の出口近くに、昔は茶屋が三軒あった と言うが、現在は近代的なドライブインであ る。

ここから小目井の砂浜道を通り、 観音岬の 山手部分を越えると宮浦であるが、この間約 4.5 Kmである。

宮浦には、玉依姫を祀る宮浦神社がある。 宮浦からいよいよ最後の烏帽子峠越えになる。 この峠は、伊東氏と島津氏の古戦場でもある。 峠を下ると吹毛井であり下り口に六地蔵があ

鵝戸神宮は、これより上りが438段、下り が 3 77 段の八丁坂を越え、鵜戸崎を北に行 った所の岩窟内に鎮座する。

(3)鵜戸から飫肥及び油津へ

これから先は、日南、串間方面の者にとっ ては、鵜戸さん詣での帰路となり、佐土原、 宮崎方面の者で更に榎原まで足をのばそうと いう者にとっては、榎原さん詣での道となる。

八丁坂登り口の前を南西に進むと、山裾に 八丁坂を独力で築いた坊薗尼の堂 がある。

現在の国道は鵜戸から風田まで海岸沿いを 通るが、旧道は鳥居峠を越えて飫肥、又は、 風田に出る。

小吹毛井の集落から杉と雑木の混交林の中 を行く道を登りつめると、鳥居峠の頂上に出 る。ここには茶屋があり、茶屋からの下り坂 には杉並木があった。今は茶屋跡のみが残る。 すまれわ31

下り道途中に硯岩の名所があり、格好の休息 場があった。ここから 500 m 程下ると東弁 分に出る道と風田に出る道との分岐点に出る。

東弁分に出るには進路を南西方向にとる。 尾根伝いの道は石垣が随所に残り、山仕事の 人達が今も利用しているので保存状態は良い。

峠路を下ると神田の集落に出るが、途中神 田溝に架かる眼鏡橋を渡る。小吹井から峠を 越し神田までの距離は約7.5 kmである。

山際に形成された神田、乙東、甲東の各集 落を通り抜け水田の中の道を更に進むと広渡 川に出る。

ここには東渡しがあり、渡し船が1艘、茶 屋もあったが、今は茶屋跡だけが残る。渡し を渡り再び水田の中の道を西へ進むと殿所の 集落である。

殿所峠を越すと飫肥の今町で、ここは飫肥 街道と鵜戸街道の接点であり、鵜戸街道の起 点でもある。

一方油津に出るには、鳥居峠の硯岩をしば らく下ったあたりから蔓ケ迫に出る道をとる。 急な坂道を下ると、水田に面した山際道であ る。風田川を渡ると、日向灘に面した約3 Km の防風林、防砂林が続く。旧街道はこの松林 に沿って南下するが、現国道の西側を行く。 途中東郷古墳、神武天皇の駒つなぎ松等の史 跡、伝説地が松林の中に所在する。

松林、そして砂浜がつきると、広渡川の河 口である。今は永久橋であるが、昔は渡し船 で渡った。近くに奇岩、奇礁で知られる梅ケ 浜の名勝があり、旅人は必ずといってよいほ ど立ち寄った。現在国道は油津から大堂津ま で毎岸線を通るが、昔は切りたった崖が海ま で迫っていたので街道は油津の町から平野、 日後谷、隈谷と迂回する山手の道がとられた。 油津は、古くからの巻町で堀川運河には眼

鏡橋が架かり、両岸には古い建物が立ち並ん で江戸情緒をかもしだしている。

隅谷は古くからの集落で、街道から西へ約2 Lmのところに、南北朝時代の板碑や五輪塔群 を残す歓楽寺跡がある。

隈谷川を渡り山を越すと、細田川河口に形成された水田地帯が広がる。水田の中の道を南下すると、下津屋野の集落である。ここからは、南郷川に沿って滝ケ平山南麓山際道を榎原めざして進む。下津屋野から下講まではほぼ県道と重なり、下講から榎原までは、国道 220 号線と重なる。

津屋野、下講あたりは、戦国時代肝属氏が 領したが、島津氏から伊東氏との仲を疑われ、 伊東氏と一戦を交えて討死した肝属の将安楽 下総介の居城跡や墓、古戦場などが街道沿い に史跡が多い。

終点榎原は油津から2里28町(約10.9 &)である。

榎原は、榎原さんで知られる榎原神社がある。

4 街道沿いの文化財

宮崎市

① 城ケ崎の町並み

鵜戸街道の起点の中村町から城ケ崎に至る 道の前半である国鉄日豊線以西は、市街区で あるため旧街道としての面影はない。

鉄道以東の通りは、道路拡張はなされたも のの左側の通りは、商家、醬油醸造元など古 い家並みを残す。

② 宝泉寺 写

街道は鉄道以東の二つ目の四辻(この当り が城ケ崎の最も賑わった所)を右折して進む が、町並みは四辻から八重川橋あたりまで続いた。

宝泉寺は、この通りの右側にある。本願寺末で宝暦8年(1758)飫肥浄念寺末から独立した。本尊は阿弥陀如来である。

③ 城ケ崎俳人墓地 ⑤ (市指定)

城ケ崎は赤江港によって繁盛した港町である。江戸時代から明治初期にかけて俳句を中心にした町民文化が栄えた。

宝泉寺の南側にこれら俳人の墓碑23基、 及び、正和3年(1314)、嘉暦3年 (1328)の銘がある板碑がある。

④ 恒久神社

八重川に架かる橋を渡り南に進むと三叉路 に出る。この間は、鹿児島県からの分県運動 に尽力した川越進の旧宅など古い民家が多か ったが、現在は近代住宅が建ち並んでいる。

恒久神社は寛治4年(1090)に創建されており、三叉路の角にある。

⑤ 赤江酢本舗 ⑤

恒久伸社から更に進むと国鉄日南線と交差する。旧道は、鉄道と国道 220 号線の間を南東に行くが、この間約700m は国道と重複しないため旧道の面影をよく残す。

通りに面した酢の醸造元でもある赤江酢本 舗は、どっしりした店構えである。

⑥ 加護神社

国道と合流するあたりから、加護神社までの間の約2.4 kmは、現在の国道と重複し国道の両側は住宅が急速に増えつつある。

加護神社は応神天皇と伊東祐邑を祀る。社 伝によれば「文明18年(1486)の創建 天文五年(1536) 奏聞によりて加護八幡の勅号を賜えり」とある。明治維新後、加護神社と改名した。

⑦ 鬼塚の渡し 写

加護神社より山裾道を南々東に進み、清武 町岩切からの道を横切り、清武川河口に開け た水田を南西に進むと鬼塚の渡しであるが、 街道はどの畦道なのか今は確認できない。

鬼塚度しは徒渉したが、冬の間だけは単板 の板橋が架かった。

⑧ 加江田神社

鬼塚の渡しから高台にある熊野の集落、車 坂の集落を通り坂を下って水田の中の道を行 くと今度は天神の渡しである。

加江田神社は熊野の集落にあり、天照大神を主神とする。もと加江田村中村に鎮座したが、寛文2年(1662)大震災にあい、社殿 毎没のため寛政11年(1799)に当地に造営された。

⑨ 天神渡し

天伸度しは加江田川沿い対岸の中島部落から約300m上流にあった。今はコンクリート造りの天神橋が架かるが、旧藩時代は単板橋を架して冬期の度しとし、その他の時期は徒渉したが、増水の時に備えて舟を一隻置いた。

10 青島

加江田川沿い山際の集落である中原、片の田や曽山寺を通り、右折して今度は海岸に平行した街道を南東に進むと折生迫である。

加江田川河口に架かる鵜来橋から折生迫までは、現在の国道と重複し特に観光地青島を

控えた商店街通りは、土産物店、食堂、ホテル等が林立し、昔のひなびた面影はない。

青島の隆起海床と奇形波蝕痕は国指定、島 内の亜熱帯植物群落は国指定の特別天然記念 物になっている。又、青島神社は、彦火火出 見尊、豊玉姫命、塩土の翁を祭神とし参詣者 が多い。

(1) 内海峠 第

折生迫から須田木に向う。須田木が内海峠の登り口である。現在、峠路は杉山の中を行く道である。頂上近くにあったという茶屋の跡は草木が繁茂し探し出せない。峠を下り今は林道として利用している平垣な道を進むと内海川に架かる橋に出る。

現在、峠路の下を国鉄日南線の青島トンネル(1.4 Km)が通っている。折生迫、内海間は約4.5 Kmである。

(12) 内海港

円海港は三面を山に囲まれ、東北より戸崎 の岩礁が突出し天然の防波堤をなしている。 漁港として木材の積出し港として利用された。

(3) 内海のアコウ ⑤ (国指定)

内海から小内海までは海岸線沿いの街道であるが国道と重なる。又、国鉄日南線も平行して走る。この間乗落はなく昔ながらの風景が行く手に展開する。

内海のアコウは、野島神社の境内にあり巨樹として有名である。アコウはクワ科の常緑高木であり、九州、四国、アジアの熱帯、亜熱帯毎岸に自生する。

野島伸社は白髯大明神とも言い塩土神と猿 田彦伸を祭神とする。

日 南 市

14 鶯巣の関所跡

小内海の集落を通り川を渡ると墓地がある。 ここからが鶯巣峠の上り口である。小内海側 の峠路は別荘地として開発が進み、旧道は 800m程破壊され赤土の地肌をあらわにし ている。鶯巣側は杉林を行く道だが、途中鶯 巣の関所の番士達が切り開いたのであろうか 殴々畑の石垣が苔むして残る。峠路の出口か ら600m程、畑地の中の平坦道を行くと、 鶯巣の関所跡に出る。

鶯巣の関所は、鵜戸往還の要所として飫肥 藩士20世帯が駐在した。関所は浜道に面し ていたが、現在、関所跡は国道拡張で消失し ている。関所は街道を通じて同地が唯一か所 であるが、慶応3年(1867年)に閉鎖した。

① 伊比井越 写

鶯巣の関所跡を通るとすぐ伊比井越である。 峠路の鶯巣側は、シイ、カシなどの広葉樹林 の中を行く溝状の窪道で 伊比井側はみかん 畑を行く。現在農道として利用されているの で街道の保存状況は良い。峠路を下ると、海 岸線を通る現在の国道と合流する。国道日南 線のガードをくぐると伊比井神社で、鶯巣、 伊比井間は約1.5 Kmの道のりである。

16 伊比井の経塚

伊比井越の峠路で鶯巣側の中程、旧道から 4 Km位上った所に経塚がある。ここには、五 輪塔や板碑が10基余りあり、中に貞和年間 (南朝年号1345~)建立のものがある。

塚には、イチイガシなど大樹があり、土地 の人々は宝物が埋蔵されている所、地震の時 は経塚山に逃げこむものと語りついできた。

切 馬の峠 写

伊比井には昔宿屋があった。伊比井の集落を出ると伊比井川に出会うが、渡しは現在の橋の位置より約300m上流にある。馬の峠は短いが坂はけわしい。峠を下ると潮小学校の裏手に出る。ここから富土の集落までは浜沿いの道であった。伊比井、富土間は約2Kmである。

18) 瀬平峠 ⑤

富土から、瀬平峠登り口までは現在の国道と重なる。瀬平の峠路の富土側は、樹林の中のトンネルを行くような道である。反対の小目井側は杉林を行く急な坂である。峠路の出口近くに茶屋が3軒あった。現在の国道は、観音岬を回りこんで行く海岸道であるが、旧道は観音崎の山を越える山路であり宮浦の集落に出る。

富土、宮浦間は約4.5 Kmである。

19 瀬平の城跡

瀬平城跡は瀬平岬の山頂にある。三面は海に囲われ、西南部が岡阜に接している。地勢は険しく梅辺からよじ登る事は出来なかった。 元弘の初め矢野下野守義之が日向に下り七浦を領した時築いた砦である。その後、伊東義祐が飫肥攻めの拠点とし、上別府常陸守が居城した。

20 七人斬りの供養碑

瀬平峠の下り口、小目井側から言えば登り口の海岸近くに、先の茶屋、中の茶屋、本茶屋と3軒あった。ここから約150m位先に、七人斬りと称する所がある。ここは、街道を行く七人の遍路が追いはぎに斬られた所で、茶屋の主人が建てたと言う供養碑が立つ。

旧暦 2月15日16日の鵜戸山のお接待日は、参詣人でごったがえし、茶屋は、わらじや宿泊者の夜具を宮浦まで大急ぎで仕入れに行ったと言う。

② 宮浦神社

宮浦神社は宮浦に鎮座し、玉依姫命を祀る。 社伝には、「桓武天皇の延暦年間再興」とある。永禄3年(1560)伊東義祐が社殿を造営した。「里人に問はずばいざや白波の玉依姫の宮の浦とは」 義祐の飫肥紀行の中の詠歌である。古来から安産の神として尊崇され、いまもつづいている。

これより西約1 kmの所に玉依姫の御陵と伝える古墳がある。

22 烏帽子峠砦跡

宮浦神社前から旧街道を拡張した林道を行くと峠路の上り口となる。烏帽子峠宮浦側は杉山の中を行く道であるか、または、急な坂道である。吹毛井側は果樹園として開かれ、みかん畑の中を行く道で峠路を下り南東に進むと、鵜戸トンネルを出た国道と合流し吹毛井の集落まで国道と重なる。峠路を下る途中に砦跡の下を通る。

この砦は、天文10年(1541)伊東義祐が都於郡から飫肥を攻めるため瀬平の嶺(伊比井)に陣した時、飫肥の島津忠広が烏帽子砦を築いて伊東の南進を防いだものである。城中には兵士が300余りいたが天文12年3月瀬平の伊東軍が烏帽子城を攻落した。

② 烏帽子峠の地蔵尊 ⑤

烏帽子峠の下り口、吹毛井から言えば登り口に六地蔵がある。鵜戸山を背後から見守る形で旧道に面している。宝暦14年(1546)

の年号と別当隆珍の名がある。

隆珍は鵜戸山第46世の別当で、鵜戸山明 王院に閑居、天明4年(1784)89才で遷 化。鵜戸山住職は26年間である。

これら地蔵尊は参詣人の道しるべになった ことであろう。

24 鵜戸参道,八丁坂 ⑤

鵜戸神宮へは現国道を横断し東へ進むと一の鳥居に出る。ここから海寄りに行くと八丁 坂登り口に行き当る。途中、新道で寸断され ているが、すぐ登り坂の石段で両脇には大杉 が並ぶ。

八丁坂は、坊蘭尼が単身で築いた石段である。遠方から参詣する善男善女のため尼僧が 人々のあざけりをよそに1人で磯石を頭上に かついで登りせっせと築いた。鵜戸山の麓か ら霊窟までの八丁の山を拓いた。

25 馬道 写

鵜戸山参道の八丁坂下り石段の途中から社 務所前に出る馬道がある。これは奉納米を積 んだシャンシャン馬が通る道で横木を埋め込 んだ山道である。今はほとんど使われず、馬 道と呼ばれてひっそりとしている。

26 鵜戸神宮と霊窟 写

八丁坂も海寄りの参道近くになると、両側に条店、土産物店、宿屋等が軒を並べ参詣者を呼びこんだ。現在は八丁坂を登り下りして 鵜戸神宮へ向うものはほとんどなく、毎岸沿いの新道を車で行く。

鵝戸神宮鎮座の岩屋は鵝戸崎北端にあり、うがやらきあえずのみこと 鵜茅葺不合尊御降誕の地と言われる。洞窟 は東西20m、南北30mの広さがある。神 殿は崇伸天皇の朝の創建とされるが、桓武天 皇の延暦年中に再興された。

島津、伊東の尊崇深く、社の別当寺の仁王 護国寺は光喜坊快久の開山である。初め天台 宗で中葉以後真言宗となる。寺坊18を有し 開山から56代で幕末となる。今も縁結びの 神社として参詣人が多い。

② 鵜戸崎 ⑤

鵜戸神宮の本殿 別当寺、僧坊が築かれた 鵜戸崎は洋上に700 m 位突出しており、浸 食によって生じた奇岩群はみごとである。な お、岬の南岸に広がる千畳敷奇岩は県指定天 然記念物になっている。

28 坊薗尼堂 写

鵜戸神宮に参詣せず烏帽子峠からの道を南 西に進むと山際に八丁坂の石段を築いた坊薗 の尼堂がある。中には木彫彩色の高さ1 m余 りの坊薗尼像が祀られている。

「延享四丁卯祀(1748)」

「奉造立大願主 隆珍」 「冬十月吉辰」 坊薗尼は豪家の酒屋に生れた一人娘で、鵜 戸山に心酔しこれが振興を図るため石段開基 に狂気の如く取り組んだ。

29 鳥居峠

現在、鵜戸から小吹毛井経由、風田までの 道は海岸沿いの国道であるが、旧道は御手洗 川を渡り集落が途切れたあたりから山を越し て小吹毛井の集落に出る。小吹毛井からは山 際道を西に進むとしだいに登り坂となり、杉 と雑木の混交林を行く道となる。

峠の頂上は、杉が若木のため眺望がよい。 昔あったという茶屋の跡は現在竹林になって いる。下り坂は急な坂で杉山の中を行く尾根 道で、麓近くになると道の両側に石垣が見ら れるようになる。峠を下り水田を前に控えた山 際道を進むと神田の石橋に出る。

鵜戸、東弁分間は約 7.5 Kmである。

30 水の尾砦(貝殻城)

鳥居峠の北西約 600 mに水の尾峠がある。 鵜戸街直は永禄の頃までは水の尾に通じ、鳥 居峠を越す道はまだ開けていなかったと見られる。天文12年(1543)破竹の勢いにあった 伊東義祐が烏帽子城を攻め取って、さらに同 14年飫肥への足がかりとして水の尾に砦を築いて兵を置いた。砦の四面には塁壁を設けたという。

すずれいわ ③1 硯岩 写

鳥居峠の頂上から 400m 程下ったところに 現状の巨岩が斜めに横たわり、くぼみ部分が路 すれれも 面と水平になっている。この岩は硯岩といわれ 旅人のよい休息場所であった。ここから油津の 七ツ八重などの名勝が眼下に望める。

32 石垣道

・規岩を過ぎると、道普請の時出てきた山石を 片側に寄せて積んだのであろうか、石垣を散見 するようになる。

かみた

(33) 神田石橋 ⑤

鳥居峠を下り終え 200m 程水田を前に控えた山際道を行くと神田溝(灌漑用)に架かる眼鏡橋に出る。日向地誌には、神田土橋と記されており長さ10m、幅1.3mである。

東弁分には石橋が多くみられたが、ほとんどが壊され、ほば原形を保っている石橋はこれ位である。

かみたみぞ **34** 神田溝

街道は神田の集落の東側を通り、鬼ケ城山の山際にある乙東、甲東の集落を通る。甲東の集落から水田の中の道を 500m 程西進すると、広渡川の中流点、東の渡しである。

神田溝は流れを鳥居峠の西麓に発し、鬼ケ 城山と高砂城山の間に開けた水田を流れ、広 渡川に合流する。

(35) 鬼ケ城跡

鬼ケ城は東の渡し手前の集落甲東からおおよそ 700m 北東にある鬼ケ城山に築かれた 岩である。要害堅固な砦で、天文年間から永禄に至る伊東、島津の攻防地となった。七浦から地続きの要衝で両軍ともここに固執したが、ついに永禄6年(1563)に伊東氏の根拠となった。伊東義祐が妖肥紀行で「番衆たち多く敵を殺せばや鬼ケ城とは人の言らん」と詠んでいる。

36 シャンシャン馬の鈴 **⑤**

松永は甲東の北西約 1.4 kmにある集落で、 ここは旧幕領であるが、この集落の農家にシ ャンシャン馬の 数と鈴が保存されている。

シャンシャン馬とは新婚夫婦の鵜戸参りや、 鵜戸山への奉納米運搬のため用いる馬を言い、 首に直径2cm、高さ3cmの鈴を30個ほど とりつけた鈴鎖を下げた。

37) 東渡し

東渡し(現在永久橋)を渡り、水田の中 の道を約500m 四へ進むと殿所の集落で、 殿所峠を越すと飫肥の今町に出る。ここは妖 肥城大手門を起点とする飫肥街道との合流点 で、鵝戸からの街道はここを終点とする。

東弁分と飫肥の間は約4.5 kmである。 東の渡しは、現在の橋より約100m 下手 にあり、明治の初め頃は渡し船が一艘置かれていた。茶屋跡は現在の橋の近くにあったが、 道路工事のため消失した。

38 東郷古墳

鵜戸から油津への道は鳥居峠の硯岩をしばらく下ったあたりから蔓ケ迫に出る道に入る。 鳥居峠から蔓ケ迫に出るまではかなり急坂である。蔓ケ迫から山際道を南に進み川を渡る と風田に出る。

風田川から広渡川に至る約3 Kmは風田の浜 といい砂浜と松林が延々と続く。旧道は国道 の西側をほぼ平行して走る。

東郷古墳は、街道左手の松林の中にある国 立療養所内にあり、長さ15mの前方後円墳 で、土地の人は狐墳と呼んでいる。

39 平山の駒つなぎ松跡

東郷古墳から約1 Km、国道沿いの旧街道を 行くと、防風林の際に「駒つなぎ松」の石碑 がある。

神武天皇は幼少の頃平山の地に住み、折々たついし 鵜戸山に竜神から授かった竜石という駿馬に またがって出かけたが、その馬をつないだと いわれるのがこの駒つなぎ松である。

40 駒宮(平山神社)

駒つなぎ松から約 100m で駒宮(平山神社)である。

駒宮は大化元年(645)の創建で神武天皇 を祀る。明治の初め平山神社と改称した。

④ 梅ケ浜渡し 第

平山神社から約1 kmほど砂道を行くと、広 渡川の河口に出る。

今は永久橋が架かるが、当時は渡し船で渡

った。なお、この河口は9月から2月頃まで は砂でふさがり、その上を人馬が往来したよ うである。

いしいて ② 石堰堤

梅ケ兵度しの北西約 300m の所に油津堀 川運河の水門がある。この水門をつくるため 築いたのが石堰堤で、高さ約3m長さ約67 mの石垣である。

43 梅ケ浜

梅ケ浜の渡しを渡ると山坂道となり、坂を 下ると掘川運河に架かる眼鏡橋に出る。

梅ケ浜は渡しの南東にあり、竜穴(洞窟)、 竜踞石(奇岩)、稲荷山、雀八重(奇礁)等 の名所が多く、この街道を行く者は足をのば した。

又、ここには梅荘があり、軍用の梅干用と して藩主に梅の実を毎年献納した。

44 乙姫橋 \$

堀川運河に架かる乙姫橋(眼鏡橋)を渡り、 山際道を北西にとり、中平野で左折して約 1.3 Km西へ進め、日後谷から山坂道を約2.5 Kmほど南へ進むと隈谷である。

堀川運河は、広度川上流で伐り出された杉 材を油津港に直接引き入れるため、天和3年 (1683)から貞享3年(1686)にかけて 掘さくされた運河である。

45 歓楽寺跡石塔群 第

限谷からは限谷川を渡り、山坂道を下ると 細田川下流域に開ける水田地帯に出る。水田 の中の道を約1.5 Km進むと滝ケ平山の北東山 麓、下津屋野に至る。

歓楽寺跡は隈谷の西隅にあり、五輪塔百数

十基、板碑6基を山中に残す。

嘉暦3年(1328) 元徳2年(1330) 正慶 2年(1333) 銘のものがあるが、ほとんどは 無銘である。

南郷町 <南那珂郡>

46 安楽下総介の墓

下津屋野からは滝平山南麓山裾と南郷川との 間に形成された道を、この街道の終点榎原神社 まで上って行くことになる。

街道沿いにある津屋野神社の手前約500m の久保田の田の中に安楽下総介の墓がある。

肝属氏の将、安楽下総介は、島津氏の誤解を とくため伊東氏とはかって偽戦を行ったが、伊 東側の全将兵にこのことが徹底しておらず実戦 となり戦死したものである。

47 湖雲ケ城跡

谷の口は隈谷と榎原のほぼ中間点にあり、榎原へは、1里20町(約5.9km)である。谷の口と脇元の境をなす山嶺を南西にのぞむことができるが、ここには安楽下総守(薬丸湖雲)が拠った湖雲ケ城跡がある。

48 榎原神社 写

榎原神社は万治元年(1658) 飫肥藩主伊 東祐久が、鵜戸神宮の神霊を勧請して創建した。 建物として、本殿、山門、鐘楼、霊屋等がある。 境内には、鵜戸様の神気がのり移った神女とし て内田ます子を祀る桜井神社がある。内田ます 子は鵜戸の坊薗尼僧と同時代(寛政)の人とい われる。

なお、榎原神社は鵜戸神宮と共に西国著名の 神社として知られ、古来より榎原参りとして参 詣する者が多い。ことに毎年3月16日例祭は 非常な賑わいを見せる。



②宝泉寺 阿弥陀如来を本尊とする宝泉寺の**鐘**楼。



⑤赤江酢本舗 昔の面影を残すどっしりした店構え



⑦鬼塚の渡し 冬の間だけ板橋がかかったこの渡しは、 宮ヶ田瀬と木崎の間にあったという。



③城ヶ崎俳人墓地 俳句を中心とした町人文化をささえた 俳人の墓碑



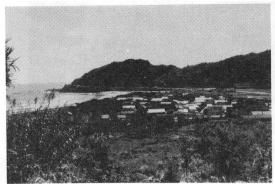
①内海峠 内海峠から見る、七浦七峠である。



⑬内海のアコウ 国指定天然記念物のアコ ウ。



⑤伊比井越 溝状の窪道を行く伊比井 峠路。



⑦馬の峠 伊比井の山から馬の峠を望む。



⑱瀬平峠 杉林の中を行く峠の南側。



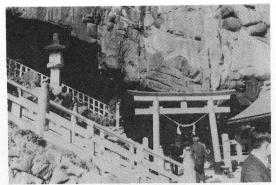
②烏帽子峠の地蔵尊
参詣人の道しるべになった地蔵尊。



図鵜戸参道・八丁坂 両脇に大杉の並ぶ八丁坂 の石段。

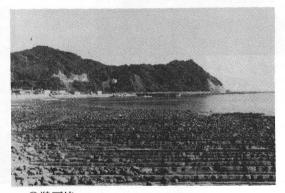


②馬 道 奉納米を積んだシャンシャン馬が通った。





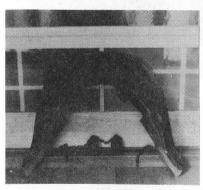
⊗坊薗尼堂 尼堂の中に祀られている坊薗尼像。



辺鵜戸崎 岬の突端に鵜戸の霊窟が鎮座する。千 畳敷奇岩は県指定天然記念物である。



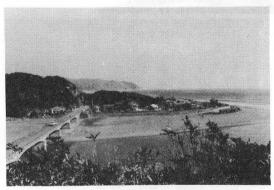
③ 硯 岩 旅人の休息場所であった が、岩の水平面から樹木が 生え硯形のくぼみは見えない。



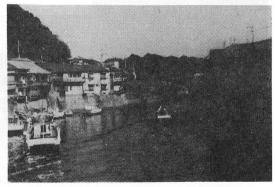
③ シャンシャン馬の鈴 直径2cm、高さ3cmの鈴 が30個ほどついていた。



③ 神田石橋 日向地誌には神田土橋と記されている 眼鏡橋。



④ 梅ヶ浜渡 9月~2月頃までは歩いて渡った広渡 川の河口。



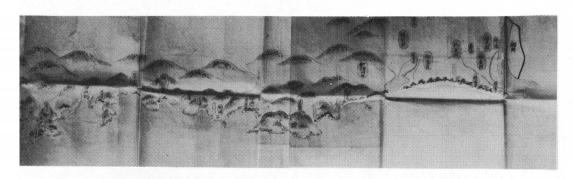
④ 乙姫橋 堀川運河の眼鏡橋で乙姫橋という。

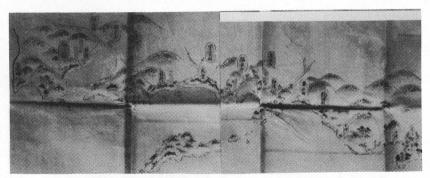


④ 歓楽寺跡石塔群 五輪の塔や板碑が百数十基残る。ほと んど無銘である。



銀 榎原神社 鵜戸神宮と共に西国著名の神社として 知られている榎原神社の山門。



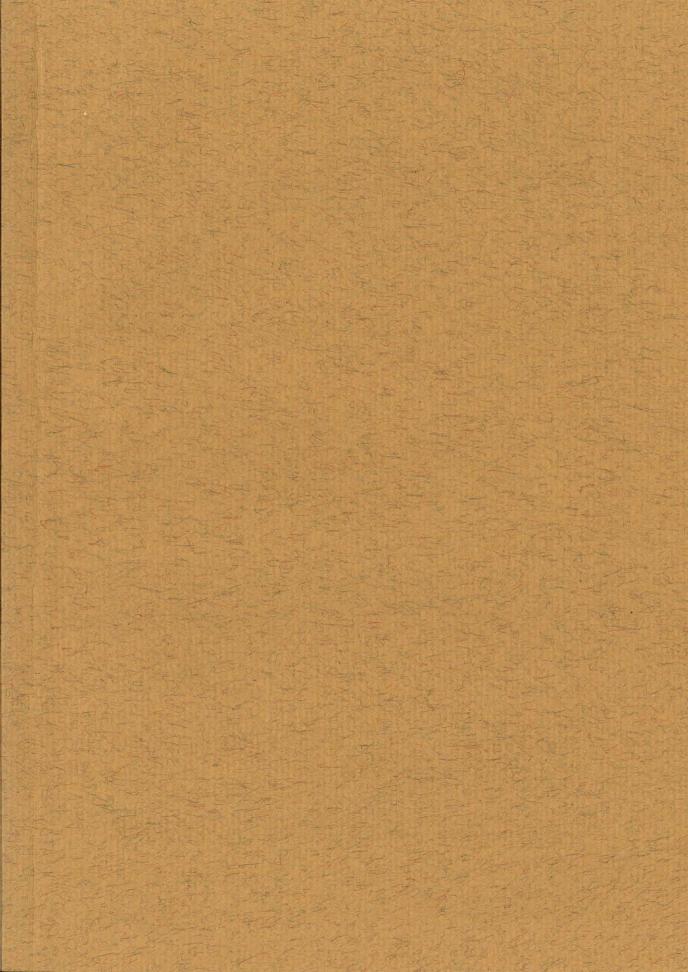


海辺村々の絵図

〇調査員

街 道 名	氏	6×		名	役	職
米 良 街 道	青	Щ	幹	雄	県文化財保	獲指導委員
木 艮 街 垣	安	藤	徳	英	妻北小学	校教諭
跃 肥 街 道	久	枝	气态	敏	県文化財保	護指導委員
队 化 闰 垣	111	崎	満	也	北郷小学	校教諭
鵜戸街道	細	田	隆	介	県文化財保	進指導委員
親 戸 街 道	堀	内	和	雄	油津小学	校教諭
志布志街道	前	田、	博	仁	大平小学	校教諭
心儿吃用追	井	手	義	徳	有明小学	校教諭

「歴史の道」調査報告書 昭和54年3月31日 編集 宮崎県教育委員会 発行 文 化 課 宮崎市橘通東1丁目9番10号 印刷所 酒 匂 印 刷





記号 ----建設中の道路 *宮 林 署 5電 波 塔 H 鉄 道 X 駐在所・流出所 ~ 坑 口・洞 口 ■ B 面 の 鉄 道 ◆電報·電話局 &温 泉·鉱 泉 取 部 ⊗高等学校 →漁 港 一送 電 線 (大)(専)大学·高専 五 段 田 広葉樹林 ---土地の利用景の界 桑

宮崎



日向青島

